MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．４．２１　発行元
第 469 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

昨年出た本の中から

昨年出版された本の中から４冊を紹介する。『このミステリーがすごい！２０２３年版』の巻末リストをチェックして、昨年出版されて読み落としていた本を選び出し、それを図書館から借り出して読んだ。

どうしても図書館利用になってしまう

毎年１２月に『このミステリーがすごい！』が出ると、「読み終えた本」と「読み落とした本」をチェックする。でも、新刊書店で全部買うほどお金に余裕があるわけでもないので、どうしても図書館頼りになってしまう。特に単行本の場合は買えないままの本が多いのだ。

図書館。新刊本はすぐに入荷するわけではなく、出版の数か月後くらいに購入になるらしい。「新刊コーナー」に並べられるが、私は遠慮して半年以上待つことにしている。ベストセラー本だと次々に借出し予約が入るらしく、新刊紹介棚に落ち着くことはないようだ。私が借りられるようになるのは大抵一年近くたって借り手が落ち着いた頃。

よく図書館で山のように本を借りる人を見かけるが、私は４～５日で読み終える量しか借りない。通常５冊程度。一週間後には返せるように努力している。ひとつの本を自分が一定期間独占するのはよくないと思うから。多くの人に読んでもらうことが大切。すぐ次の人へ。

大倉崇裕　『樹海警察2』

昨年の３月にハルキ文庫から出た本。シリーズ第二作。キャリアなのに山梨県警上吉田署に設置された地域課特別室に配属されてしまった柿崎努警部補。ここは富士山樹海で亡くなった人を捜索し遺体を収容する部署。柿崎は不慣れな環境の中で、さまざまな事件に巻き込まれ右往左往することに。部下は二人だけ。栗柄慶太と桃園春奈。二人ともにマイペースなのに時々鋭い洞察と行動力を発揮することがある。三話収録。

今回はガイドに案内されて富士風穴の中に入った旅行客が死体を発見するところから始まる。それは甲府市での殺人事件の容疑者と目されていた人物だった。自殺なのか、事故なのか、はたまた…。

佐藤青南　『嘘つきは殺人鬼の始まり』

昨年４月に宝島社文庫から出た本。『ＳＮＳ採用調査員の事件ファイル』という副題がついている。ＳＮＳ上の裏アカウントを探り出し、就活生の情報を企業に流すインターネット探偵の潮崎真人が主人公。潮崎の元に彼のせいで就活に失敗したと話す大学生の茉百合が押しかけてくるところから始まる。茉百合はバイト助手として居座ることになり、潮崎がネット上で知り合ったネトカノが殺人の被害に会ったり、行方不明になったりしていることに気付く。警察はこの情報に耳を貸さず、二人は殺人鬼と対決することに…。佐藤青南の作品にしてはゴタゴタした流れで今一つ整理されていない印象。ＳＮＳ上のやりとりの部分がそういう雰囲気を作るのかも…。

梶永正史　『ドリフター』

昨年４月に双葉文庫から出た本。梶永のこれまでの作品とは違ってアクションを前面に出した作品。元自衛官の豊川亮平が主人公。インドネシアのバリ島で恋人を爆弾テロで亡くした後、その犯罪組織を一人で壊滅させたらしい背景が語られる。現在は目的を失い、東京の荒川河川敷でホームレスの仲間入りをして暮らしている。ホームレス襲撃の若者を撃退したことから宮間という刑事に救い出される。謎の組織と連絡を取り合うようになり、中国の「浸透計画」というスパイ作戦に対抗する活動に取り込まれていく。疑惑の会社に潜入して…。

吉川英梨　『海蝶　鎮魂のダイブ』

昨年の４月に講談社から出た本。『海蝶　海を渡るミューズ』に続くシリーズ第二作。「海蝶」とは海上保安庁の女性潜水士につけられた名前。男性潜水士は「海猿」。日本初の「海蝶」となった忍海愛の物語。とは言いながら、東日本大震災を真正面から描いたストーリーなので、私にはなかなか辛い内容だ。愛は中学三年で気仙沼で津波に巻き込まれ、海上保安官にかろうじて助けられた。その時一緒にいた母親の手を離してしまい、それが大きなトラウマになっている。その後必死の努力で潜水士とはなったものの、辛いことの連続。

今回は「海蝶」になって、自分を助けてくれた佐崎と再開を果たすところから展開していく。佐崎は海上保安官を辞め、レストラン船ファンタジアの乗組員になっていたのだ。それぞれに抱えるものがありながら、震災のことを簡単には口に出せない状態が続いていく。そして、二人の乗ったフェリーの中で大事件が持ち上がる。ここからの圧倒的なサスペンスが吉川英梨の持ち味である。